九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料と公共性 : 2019年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院：教授

藤川, 隆男
大阪大学大学院人文科学研究科：教授

市澤, 哲
神戸大学大学院人文科学研究科：教授

松田, 陽
東京大学大学院人文社会系研究科：准教授

他

https://doi.org/10.15017/2557155

出版情報：2020-03-06. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

３．講演会「フランスにおけるアーキビスト養成（過去、現在、未来）：学問的、社会的および政治的課題」

日時：2019年12月7日（土）　15時～17時30分
会場：学習院大学中央棟　301

主催　学習院大学大学院 人文科学研究科 アーカイブズ学専攻
共催　学習院大学文学会
協力　科学研究費 挑戦的研究（萌芽）18K18528「国際化、情報化環境における歴史資料の公共的利活用と管理に関する基礎的研究」（代表者 岡崎敦）
後援　内閣府、独立行政法人国立公文書館、日本アーカイブズ学会

プログラム
　オリヴィエ・ポンセ教授（フランス国立文書学校・PSL研究大学）
　　「フランスにおけるアーキビスト養成（過去、現在、未来）：学問的、社会的および政治的課題」 Former des archivistes en France, hier, aujourd'hui, demain : un enjeu scientifique, social et politique

質疑応答

フランス国立文書学校教授のオリヴィエ・ポンセ氏をお迎えして、「フランスにおけるアーキビスト養成」と題する講演会を開催した。

ポンセ教授は、1969 年生まれで、1993 年に国立文書学校を卒業後、国立文化遺産機構での研修を経て、1994 年にはパ＝ド＝カレ県文書館のアーキビスト、2000 年にはパリの国立中央文書館のアーキビストを歴任した。この間、1995 年にはローマのフランス学院に学術研究員として留学し、2004 年から母校の国立文書学校の教授を務めている。ポンセ教授の専門は、フランスおよびイタリアの政治、外交、制度史で、文書学校での卒業論文のテーマは 16 世紀フランスの政治家であったポンポンヌ・ド・ベリエーヴル、1998 年にパリ第 4 大学に提出した博士論文は、17 世紀における教皇庁のフランス聖職禄政策であった。
文書学校では、近世文書学の担当職にある。文書学こそ、文書学校のいわばメルクマールをなす学問であるが、文書学校では、最近になって、伝統的な中世文書学に加えて、あらたに近世文書学と現代文書学の 2 つの講座を新設した。近世文書学講座は、厳密には「制度・アーカイブズ・文書学」と題されたポストで、講演のなかで触れられている文書学校カリキュラム改革を象徴する重要な講座である。ポンセ教授にかけられた期待の大きさが

うかがわれる。最後に、2018 年、2019 年と続けて、学士院の褒賞を受賞しており、名実ともにフランス学界を代表する研究者の一人である。

今回の講演会は、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の保坂裕興教授のご厚意で実現した。学習院大学文学会の共催、内閣府、国立公文書館、日本アーカイブズ学会の後援を得たのも、保坂教授のご配慮によるものである。周知のように、国立公文書館では、アーキビストの職務標準に続き、認証制度についても検討に入っており、2019 年 11 月には、その準備作業の一環として内外の養成制度調査報告書が公表されたが、保坂教授はこれらのイニシアティヴを一貫してとられている。

今回の講演会は、このような動きを念頭において、地方および中央の国家文書館のアーキビストの経験を持つ一方で、ヨーロッパ規模の視野を持つ歴史家でもあり、現職のアーキビスト養成専門学校の教員を務められるポンセ教授の来日を機会に、企画されたものである。世界ではじめて民主主義的な国家文書館、固有のアーカイブズ立法、そしてアーキビスト養成の専門学校を設け、国際アーカイブズ評議会においても中心的な役割を果たしてきた一方で、デジタル時代の大きな変容のもとで改革の途上にあるフランスの事例について、多様な経験を有するポンセ教授に、19 世紀以来の経験と現状を論じていただくことは、固有の伝統を維持しながら、激変する世界の動向を前にしつつ、独自の方向を模索している現在の日本のアーカイブズ関係者にとって、意味がないとは思われなかったのである。

なお、講演後の 12 月 9 日（月）には、国立公文書館を訪問し、加藤丈夫館長ほか、専門スタッフとの意見交換が行われたことを付記しておきたい。

以下は、当日のフランス語講演原稿を翻訳したものである。講演ではパワーポイントも使用されたが、原稿にない文献の引用については、本文の当該箇所に再録したことをご理解いただきたい。

なお、ポンセ教授によると、今回の講演の内容は、フランス・アーカイブズ組織の長をはじめ、関係者との間で意見交換しながらまとめられたとのことで、帰国後、あらためてこの内容をもとに論文に書き直し、学術雑誌に寄稿を予定しているそうである。このため、フランス語原文の再録は差し控えたことをご理解いただきたい。

最後に、ポンセ教授の講演のあとに、イギリスとフランスにおけるアーキビスト養成の現状についての論考を掲載した。後者は、共同研究代表者の岡崎が、国立公文書館編『アーキビスト養成・認証制度調査報告書』（2019 年 11 月公表）に寄稿したもの（ポンセ教授講演会の当日、参考資料として参会者に配布された）を、増補改訂したものである。